第 17 回日本在宅医学会もりおか大会　**一般演題**

（実践報告）抄録用紙

演題名 （全角 80 字以内）	在宅療養を支える医療スタッフの中での事務職員の役割
演者名	唐澤一夫、高野悠介、今西美穂、藤田将仁
所属	上伊那生協病院付属診療所

はじめに

当診療所は訪問診療に特化した診療所として 2009 年開設、現在 170 名の訪問診療を行っている。今回事務職員として、医療スタッフと共に末期がん患者にかかわった経験を報告する。

事例

① 50 代腎癌末期男性、独居で車いす利用、アパート 2 階の生活は外出等に困難を極めることから、引越しを計画。生活保護受給であり行政とも連携し、当日は事務職員 3 名と法人内事務職員 4 名、患者友人らと作業を行い、その後の外出等につなげられた。後日、「思い出の場所でご飯を食べたい」と言う希望に対し、医師・看護師・友人と共に居酒屋までの往復をサポートした。思い出の場所で語る友人との姿、満面の笑顔、普段の生活では見られない生き生きとした姿を見ることができた。

② 70 代大腸癌末期男性、「自分が生まれ育った場所に行きたい」と言う希望に対し、片道 2 時間の生家へ、小学校、お墓参り、それぞれの場所での思い出を懐かしみながら職員に語ってくれた。

③ 60 代胃癌末期男性、妻と二人暮らし、退院後の療養は 1 階になる。「自分の書斎をもう一度みたい。」と言う希望に対し、患者を抱え 2 階へ移動する。綺麗に整頓された机上や本棚をものは言わずともじっくり眺め、最期の時に向け確認しているようにみえた。奥様とベッド上に腰かけ、照れくさそうに見つめ合う二人が印象に残った。

まとめ

いずれの患者もかかわり後 1 週間から 10 日の間に永眠された。短い時間のかかわりであるが、その方の生きざまに触れ、医療スタッフと共に患者の思いに寄り添い、感動を一緒に分かち合う事ができた。事務職員 3 名、管理運営や請求業務、相談業務などの「1 人一役」ではなく、今後も患者を支える「チーム在宅」の一員として最後まで住み慣れた場所で過ごしたいその思いを大事にしたい。